

悲劇を生む再犯を防ぎたい。

「まつとうに生きよう」と決意した瞬間から、  
“仲間”が増える居場所をつくる

### 「セカンドチャンス！」

過去を隠して生きるプレッシャーから、孤独に陥り、

昔の仲間と再犯を行ってしまうケースが後を絶たない少年院出院者たち。

「まつとうに生きよう」と決意した彼らに居場所を提供し、  
「必要とされたい」と願う彼らの気持ちに応える取り組みについて、

NPO法人「セカンドチャンス！」理事長の才門辰史さん、メンバーのSさんに話を聞いた。



少年院を出た夜、  
孤独と自己嫌悪で走り続け、  
号泣した

か？ 17歳の時にある事件を起こ  
し、少年院で5ヵ月過ごした経験  
をもつ、メンバーのSさんが話し  
てくれた。

「パソコン、ワープロ、農作業を

習得する時間がありました。ほか

に筋トレやランニング、行進など

をする体育の時間、ひたすら黙想

して、これまで振り返り反省す

る時間、数学や漢字の勉強をする

時間がありました。1日の終わり

には、自分のどういうところを改  
善すべきか、アドバイスし合う集  
会が開かれました

ある時、カラオケボックスで仲  
間と見知らぬ男性との口論が大乱  
闘へと発展し、才門さんもモップ  
で応戦。相手に大けがを負わせた。

半年後、アルバイト先のスキー場  
へ数人の警官が来て逮捕された才  
門さんは、それから1年を少年院  
で過ごした。

少年院とは、どんなところなの  
勢を張つてしまふので、トラブル  
で過ごした。

少年院を出た後、法務教官と出  
院者、あるいは出院者同士で連絡  
を取り合うことは禁じられてい  
る。「出院者同士はどうしても虚  
偽を張つてしまふので、トラブル  
で過ごした。

になりやすい。会ってはいけない  
というのもうなづける」と、才門  
さんは言う。

しかし、いざ少年院を出てみると  
「孤独で仕方がなかつた」と二  
人は口をそろえる。

Sさんは出院した翌朝から、と  
にかく町中を走り回った。そして  
才門さんは出院したその日に友人  
を訪ね、「俺のことチクつたやつ、  
許さへんから」と、警察に情報提  
供した仲間への怒りをぶちま  
けた。

「昔の仲間とは縁を切ると親に  
誓つたばかりなのに、さっそく裏  
切つた自己嫌悪で夜も眠れず、家  
を抜け出して岸和田から和歌山  
方面に向かって海沿いを走り続  
けました」

今までにない解放感。

対等な関係を築ける交流会

いきなり自由を手に入れた戸惑  
いと、空白の1年を早く取り戻し  
たいという焦りで、何からどう手  
をつければいいのか、頭の中がこ  
んがらがつてしまつたのだ。

走るうちに、「俺は親にも兄弟  
にも許されて受け入れてもらつた  
のに、なんでそんなことも許せへ  
んねん」という気持ちがこみ上げ  
てきて、民家の壁際にへたり込み  
号泣した。

その後、東京のフリースクール  
富さんからは、これまでの寂しさ  
をぶつけるように洗いざらい話  
した。その後も交流が続いた津  
富さんは、「犯罪社会学」という講  
義の一環で多摩少年院を見学し  
た。

制服、鉄格子、かけ声、行進  
…。すべてが自分の入っていた  
時と重なり、ドキドキしました。  
その気持ちを抑え込むことがで  
きず、帰りに思わず、講義を担当  
していた津富宏先生に、少年院  
出院者であることを打ち明けま  
した。

偶然にも津富さんは、才門さ  
んが入っていた浪速少年院の元  
法務教官だった。それを聞いた  
才門さんは、これまでの寂しさ  
をぶつけるように洗いざらい話  
した。その後も交流が続いた津  
富さんは、「犯罪社会学」という講  
義の一環で多摩少年院を見学し  
た。

その後、東京のフリースクール  
富さんからは、これまでの寂しさ  
をぶつけるように洗いざらい話  
した。その後も交流が続いた津  
富さんは、「犯罪社会学」という講  
義の一環で多摩少年院を見学し  
た。

に電話が来た。

「刑務所を体験した人が出所者をサポートするスウェーデンの『K R I S』というグループの少年部門『ヤング・クリス』を見て誘いだった。こうして08年、「S C！」が誕生した。



交流会の様子

「1回目の交流会は、サポートを通して出会った出院者同士が集まって交流を深めました。東京で月に1度、定期的に開いているうちに大阪、福岡、名古屋の出院者からも手があがり、今では全国11カ所で開催しています」

少年院を出ると、地元を離れて出院者であることを隠し、真面目ぶつて生きるか、地元に戻つて悪關係なく、あくまで対等で、しが

らみや不良文化を持ち込まず、ありのままの自分を出し合いで、新しい関係を築いていく場」だと才門さんは言う。

取材の日、長野の交流会を見せてもらつた。この日は、4人の当事者とサポートの弁護士2人が参加。15歳の出院者が自らのライフストーリーを語るDVDを鑑賞し、自己紹介をした

後、ざつくばらんな意見交換が始まった。最近あつたよかつたこと、職場でカミングアウトしたこと、S C！の展望などが話題にのぼつた。

参加者にとってここは「家庭とも職場とも違う居場所」であり、「今までに味わつたことのない解放感を感じられる場所」なのだという。

交流会は事前に連絡をすれば、出院者でない人も参加することができる。

ほしいのは  
自分が「必要とされる場」や  
"役に立つチャンス"

S C！は支援団体ではない。メンバーの中には「協力雇用主」となり、出院者を積極的に雇つてゐる人もいるが、それはあくまでも個人的な活動だ。

「出院者の多くは支援されたいとも思つていなないし、自分が支援してもらえる立場にあるとも思つてない。ただ、『必要とされる場』

や「役に立つチャンス」がほしいとは誰もが思つてゐる」と才門さんは言う。

その気持ちと経験を生かすために、S C！ではメンバーが少年院に出向き、自らのライフストーリーと活動の紹介をする講演を行つてゐる。実際、講演を聞いて出院後にメンバーとなつた人もいる。

そして年に1、2度は一般市民に向けたシンポジウムを開催している。

いうまでもなく「加害者」のもう一方には「被害者」がいて、心や身体に深い傷を負つてゐる。会の目的はあくまでも、そのような悲劇を生む「再犯」を防ぐことだと才門さんは言う。

現在、50人の出院者が登録しているメーリングリストには、「町でにらまれて殴つてやろうかと思つたけどやめた」など、つまづきそうになりながらも、まつとうに生きようともがくメンバーの本音が投稿されることもある。

音が投稿されることもある。

「自分には家族がいて、何度も失敗してもチャンスをもらえた。一方で家庭が崩壊していく『俺は恵まれていない』という怒りで満ちて

いたメンバーもいる。彼は親に求めることをやめて自分で新しい家族をつくつた時、胸のつかえが取

れで楽になつたと話していた。親

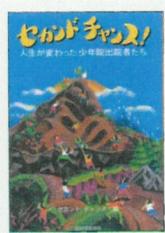
や生い立ち、人のせい、社会のせいにしているうちは前に進めない。

まずは自分の意思で罪を犯したと認めること。それがS C！の活動で大切にしていることの一つです」と才門さん。

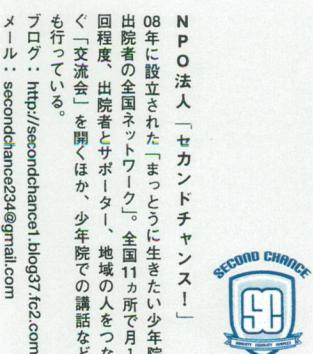
中には残念ながら少年院を出た後、刑務所に入つてしまつたメンバーもいる。

「それでも彼が出てきた時には『待つてたよ』と声をかけて迎えたい。『まつとうに生きよう』と決意した瞬間から孤独になるん

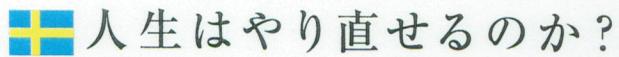
才門辰史さん



『セカンドチャンス！—人生が変わった少年院出院者たち』  
NPO法人セカンドチャンス！編  
新科学出版社／1500円+税



NPO法人「セカンドチャンス！」  
08年に設立された「まつとうに生きたい少年院出院者の全国ネットワーク」。全国11カ所で月1回程度、出院者とサポート、地域の人をつなぐ「交流会」を開くほか、少年院での講話なども行つてゐる。  
ブログ：<http://secondchance1.blog37.fc2.com/>  
メール：[secondchance234@gmail.com](mailto:secondchance234@gmail.com)



# 人生はやり直せるのか？

## 再犯率 75 パーセント減。海外にも広がる活動

### 「K R I S」

13年間にわたり出所者の更生支援を続け、

メンバーの再犯率を 75 パーセント下げるに成功したスウェーデンの NGO 「K R I S」。

自身も前科 53 犯の出所者である、代表のクリステル・カールソンにその支援活動を聞いた。



特集

53回の有罪判決後に決意。  
「もう一度、娘たちの  
父親になりたい」

K R I S ・ヨーテボリ支部に集まるメンバーたち  
写真提供：長田敦史

太い両腕には、花と龍の刺青。身長は 190 センチと見上げるほど大きく、どう見ても『ギャングのボス』にしか見えないクリステル・カールソンだが、彼のまわりにはいつも、穏やかな表情をした仲間たちが集まっている。

「本当に大事なことは、心の中で感じていることをありのまま話せる場、そして話し相手がいることなんだ。それが何よりも犯罪や薬物にかかわることなく、眞面目に生きるうえで大切なことなんだよ」

彼がそんな哲学を得て「K R I S」を立ち上げるまでの道のりは、長く、険しいものだ。

始まりは 5 歳の時。幼かったカールソンは ADHD (発達障害の一種) と診断され、『治療薬』としてアンフェタミンを処方された。この薬は合成覚醒剤として知られており、彼が薬物依存症になるきっかけをもたらした。

そして 8 歳になつた時、南部の田舎町から首都ストックホルムに移住したカールソンは、学校で大きな身体つきと田舎なまりを理由にいじめの標的となる。

「最初はただ、悲しかつたんだ。でもある日、いじめた相手を殴り返したら、まわりの尊敬を初めて勝ち取つたように感じた。そうやって注目を集めることができた」

**出所後 48 時間が大事。  
携帯電話でいつでも連絡可**

その後、刑務所を出所したカールソンは、以前から知り合いでたという薬物依存症の自助グループ (N A・ナルコティック・アノニマス) のメンバーに連絡をとつた。「自分を支援してくれない

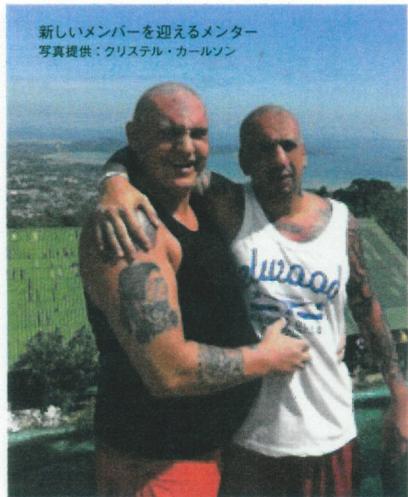
から、喧嘩を続けることが日常になつてしまつたんだよ」

その後、学校で起こした暴力事件で少年院へ。18 歳の時には、処方が終了したアンフェタミンほしさに勤務先の小切手を勝手に使うなど、詐欺罪で逮捕された。

「それ以来 34 年間、俺は薬物依存症と、犯罪者の人生を送ってきた。窃盗、強盗、薬物売買……。殺人と性犯罪以外はあらゆる犯罪にかかわって、裁判所で 53 回も有罪判決を受けたんだ」

やがて年を重ね、46 歳になつた時「おまえは救いようのない事例 (ホーブレス・ケース) だ」と刑務官に言い放たれた。

「その時、自分自身に問い合わせたんだ。俺には娘が 2 人いるけど、親権も失つてしまつた。でも娘たちの父親に、もう一度なれるチャンスはあるだろうか?」って。それで決意したんだ。自分は刑務所から出て、まつとうな人間になれる。『おまえは救いようがない』といつた彼らに、自分が立ち直った姿を見せてやるんだってね」



新しいメンバーを迎えるメンター  
写真提供：クリステル・カールソン

そこで9年、NAなどで出会い、た仲間10人とともに、カールソンはNGO「K R I S」を立ち上げた。その基本的な活動は、K R I Sの当事者スタッフが全国各地の刑務所に年2千回以上出向くことから始まる。そして「依存症」「家族」「お金」などをテーマにしたミーティング（スタディ・サークル）を受刑者たちとともに行い、「私も刑務所に入つていたんだ。

「ある」と知人が答えた。「一ヶ月は毎日NAのミーティングに参加すること。そして2つめは、毎日夜9時、僕に電話をくれることだ」こうしていつでも相談できる友人ができ、NAのミーティングに参加するようになったカールソンは、自身の経験をわからち合い、仲間同士で支え合うセルフヘルプ・グループの可能性に気づかされた。そして「出所者を支援するのではなく、こうしたミーティングだけでは不十分だ」とも。

これからはKRISSTがあなたの側にいるよ」と伝える。そのうえで、出所が近づいた人々と連絡を密にし、出所日にはメンバー数人が刑務所の出口で待機。釈放された人を抱きしめ、新たな「仲間」として迎え入れる。

日本の矯正施設は  
もつと外部に

新しいメンバーは「何か困ったことがあるればいつでも電話してほしい」と携帯電話を手渡され、メンターと呼ばれるスタッフに24時間連絡をとることが許される。メンターも出所者で構成され、かつては自分が支えられた経験を活かし、今度は支え手側にまわるのだ。

さらに、全国26カ所にあるK.R.Sの各支部では、刑務所内で行うのと同じスタディ・サークルを

で、俺たちはもうそばにいるんだ  
実は出所してから48時間が一番混  
乱しやすく、本人にとつても大変  
な時で、支え合いが最も重要な時

く、社会でどのように生きていいければいいのか？それを同じ体験をしてきた仲間たちから少しづつ学んでいくんだよ」

この他にも、KRIISでは若者ための居住施設「ライフスタイル・ハウス」の提供、個別の就労活動によってメンバーの再犯率を75パーセント下げるに成功。初めはボランティアとして始まつた活動も、現在では再犯防止に尽力する姿勢が社会貢献として評価され、スウェーデン政府による支援、マイクロソフトなどの企業寄付、講演活動の収入などにより、事業として成立することになった。

「思いもよらぬところから支援を受けることもあるんだ。俺たちの

「日本では建前が重視されるが、重要なのは教官などに与える印象を気にすることなく、自分の本音はもつと外部に開かれたほうがいい」と語る。

せるのか？ その問い合わせに、誰もが納得する答えを出すのは難しいだろう。しかしクリステル・カールソンは、その問いに全身全靈で答え続けようとしている。

生をやり直せるのか？ その問い合わせに、誰もが納得する答えを出すのは難しいだろう。しかしクリステル・カールソンは、その問いに全身全靈で答え続けようとしている。

たという。「そう思われるのも無理はなかつたと思う。でも俺たちは、一緒になつて問題に立ち向かえば、やり直すことはできるはずと伝えたい……。ただ、けだつたんだけだ。人は、人

Sのような団体が施設に入っていたら「本気で変わりたい。やり直したい」という意欲を、実際のモデルを見ることによって育てることができるはずだよ」

そんなK R I Sも、活動を始めてしまらくは「刑務所にいる人々を解放しようとする、危ない連中だ」と誤解を受けることも多かつた。

97年には「スウェーデン」へ設立された、出所者による自助組織。4つのボリシー「薬物（アルコール）戒禁」「正直」「友情」「連帯」を元に、刑務所内・出所後の更生支援を行つ。Kris-a-seは「Kriminellas revanch i Samhället」の頭文字で、「罪者の社会復帰」を意味する。



取材協力：セガントチャンス！名古屋

97年には「スウェーデン」へ設立された、出所者による自助組織。4つのボリシー「薬物（アルコール）戒禁」「正直」「友情」「連帯」を元に、刑務所内・出所後の更生支援を行つ。Kris-a-seは「Kriminellas revanch i Samhället」の頭文字で、「罪者の社会復帰」を意味する。

<http://kris-a.se/>